



Title	集団移転とコミュニティの持続 : 復興目指す気仙沼市小泉地区の選択
Author(s)	森, 傑
Citation	センターレポート, 42(3), 20-25
Issue Date	2012-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50327
Type	journal article
File Information	Cent Repo.182.20-25.pdf



集団移転とコミュニティの持続 ～復興目指す気仙沼市小泉地区の選択～

森 傑

北海道大学大学院工学研究院
建築都市空間デザイン部門建築計画学研究室・教授

1. はじめに

「まちの整体」という視点を提唱している。地方で未利用・低利用なまま抱えられている公共施設群の再編を軸にしながら、人口激減時代を見据え、生活基盤環境の質的な適正化を図るものである。いわゆるコンパクトシティ論のように聞こえるかもしれないが、都市構造に対する捉え方と目標の描き方がそれとは本質的に異なる。

地方の小都市は、国レベルの高度成長・人口増加における生産と消費に追従すべく、これまで必死になって筋肉をつけてきた。筋力を上げるためなら、中央からのドーピングも積極的に受け入れた。しかし当然、そのような不自然な筋肉増強は本来の骨格には見合わない。筋肉とのバランスを欠いた骨格は、生産と消費に酷使されることで様々な歪みを生じることとなった。そして、低成長・人口減少への変化の中で次第に痩せ細り、ごまかし続けてきた歪みも、生活に支障をきたす痛みや病となって現れ始めた。

「まちの整体」は、地方都市の歪みを本来もっている骨格へ整え、老いが進みながらも適切な代謝を維持し、大手術や投薬に頼ることなく最期まで自力で食べて歩ける身体へと改善しようという戦略である。適正な身体を自己管理しながらもついには自力で食べて歩けなくなったとき、そのまちは人生を全うしたといえると思う。

縮退という言葉が普及して久しい。例えば、限界集落という見方でいえば、北海道では近い将来消滅すると予想される集落は百数十にのぼるといわれる。しかし、このような消滅という衝撃的な未来予想図でさえも、国全体が人口減少しているのだから仕方がないと、妙に世間は納得しているところがあるようだ。

はたしてそうだろうか。かなり不合理な消滅もその中には多いのではないか。先の比喩に絡める

と、ドーピングが切れたあとの急激な衰弱と治療と称した大手術や投薬による寝たきり状態、その行く末としての消滅なのではないか。

日本の地方小都市のあり方として挑戦的に検討したい将来像がある。これからの急速な人口減少を見据えると、大都市や中核都市へ人口が移動し、弱小都市は消滅していくと想定するのが一般的なリアリティであると思うが、あえてそれとは異なる将来の可能性を描いてみたい。それは、日本各地で小規模のまちが自立的に持続していくような時代、大都市・中核都市は大幅に人口が減少するが、地方の小都市は「まちの整体」に取り組み、身体に見合った規模を維持していくというあり方である。

さて、我々は今、東日本大震災という現実直面している。復興計画の具体性がまだまだ見えてこない。このまま地方を放置していると、被災地の外へ移住する人が増えるのは確実だ。これは税金を使わない最も簡単な縮退誘導ともいえる。そのようなシナリオに少なからずリアリティを感じてしまうのも恐ろしい。だが、それで得られる日本の未来は本当に幸せなのだろうか？

2. 小泉地区の始動

筆者は縁があり、気仙沼市小泉地区における住民発案の集団移転計画に携わることになった。集団移転については、他の被災地からもいくつか話題に上ってきているが、小泉地区はその始動の早さから特に注目を集めている。

筆者は、この住民主体による高台集団移転を実現するために協力している専門家の一人であるが、実は昨年6月から小泉の仲間に入れていただいた途中参加組である。

小泉地区のいち早い始動は、筆者が住民を後押ししたり賛同を呼びかけたりしたものではない。筆者が相談を受けた時点で既に「集団移転へ向け



小泉小学校から望む被災前の小泉地区

て住民をまとめた」という状態ではなく、「集団移転を決めたので実現するための知恵と技術を借りたい」という話であった。まだまだ他の被災地が復旧に追われているような時期に、その小泉地区の意欲と行動力に驚かされた。

小泉地区の住民は、被災間もない2011年4月に「小泉地区明日を考える会」を結成した。そして同時に、同会が事務局となり集団移転協議会の準備委員会を立ち上げ、住民意向アンケートなどを自ら実施し、跡地利用も含めた住民間での合意を進めてきた。

しかし、この小泉地区の主体性をいわゆる都会的なまちづくりにおける住民参加という感覚で捉えられてはまずい。確かに小泉の人々は、自分自身でまちを早く再生したいという思いで取り組んでいる。それを強く後押ししているのは、皮肉にもこの視界不良な国の現状である。

例えば、北海道南西沖地震で津波の被害を受けた奥尻町では、被災から2カ月半後には、高台移転を含む土地利用構想が道から提示された。原発も含め未曾有の事態であることは認めるが、今回いかに国や自治体の動きが鈍いかがわらう。

加えてもう一つ、小泉地区にはある種の焦りがある。手を上げて主張しなければ目を向けてもらえないという地域格差。取り残され忘れ去られるという不安が人々を動かしている。

被災地の中には、震災前から既に過疎化が進んでいた地域も少なくない。小泉地区もその一つである。「まちの整体」は既存の更新が前提であるが、集団移転は全く新しい身体として生まれ変わるに近い。被災しなくとも数十年後にはおそらく、まちをたたくのか否かの選択を迫られたかもしれない。そのような小泉に、たとえ新しい身体を得た

としても何十年・何百年とまちを持続できるポテンシャルはあるのだろうか。正直悩ましい。しかし、先の縮退シナリオは国家的には合理的かもしれないが、人間的には確実に不合理なはずだ。

3. コミュニティの持続へ

小泉地区は昨年3月11日に十数メートルの津波に襲われ、同地区の518世帯のうち266世帯が流出・全壊という被害を受けた。一方、そのような壊滅的な住家被害に対して、1,810人の住民のうち死者・行方不明者は43人ととどまった。約3%という人的被害は、隣町やその他の沿岸部集落に比べ奇跡的ともいえる低さである。このことは小泉地区の立ち上がりの早さと大きく関係している。

今回の復興の困難さを認識するために、あえて乱暴なたとえ話をしたい。復興へ向けて率先して他の住民を引っ張っていくような人間が、ある地域の中で1割くらい出てきてくれると仮定しよう。人口50人の集落が被災しその6割の30人が生存したとしても、旗振り役となる人はたったの3名である。

住民が自力で復興へ動き出すためには、資金力や労働力は当然として、現実問題として情報を発信・収集できたり様々な支援や援助を取り付けたりできるコネクションも不可欠である。復興に必要なリソースへたどり着くことのできる確率は、生存者が多いほど旗振り役が多いほど高くなる。筆者は、これが今回の被災地の特徴の一つであり厳しい現実であると痛感している。

東日本大震災で被災した沿岸部の集落は小さなところばかりである。十数世帯で暮らしていた集落がほとんど跡形もなく津波に飲み込まれた。小泉に通っていると、少なからず周辺地域の声が届



避難した小学校から見る被災後の小泉地区

いてくる。生存した人々は決して希望を捨ててはいない。

しかし、動くことのできる人間が一人や二人では何もできない、立ち上がるにも立ち上がれない現実が目の前にあるのだ。人の生死は数でその重みを比較することは当然できない。それでもやはり、多くの小泉の方が生存したことが復興への勇気ある一歩を踏み出すことにつながったのは確かであろう。

だがこれも、小泉地区の運が良かったという話ではない。小泉の人的被害3%は決して運任せの結果ではなく、コミュニティとしての必然として成し得たのだということを伝えたい。

3月11日の直前、小泉地区では津波を想定した避難訓練を実施していた。避難先として地区会館が指定されていたのであるが、訓練の際に「ここだと大きな津波が来ると危ないのではないか」という意見が出たという。それをきっかけにその場で議論し「次回に避難をするときは高台にある小学校へ」となったと聞いた。

そして3月11日、地区会館へは津波が押し寄せ、多くの人が高台の小学校へ避難し助かった（写真）。だが、避難場所を高台に設定しただけで人命を救えるわけではない。住民がその高台へ避難しなければまったく意味はなく、高台に避難場所を定めていても多くの被害者を出した地域も少なくない。小泉には、突然変更した避難場所を短時間でほとんどの住民へ周知できるコミュニケーション力と、誰がどこにいるのかを皆が認識し互いに助け合いながら避難できた結束力があったのである。

それではなぜ、小泉の人々はコミュニティの継承・持続の手段として高台への集団移転を選んだのか。その理由をはっきりしている。かつての場

所に住めなくなったからである。住めないという理由には、地区全体が地盤沈下したことや農地の塩害が甚大であることなど直接的・間接的に様々な側面があるが、小泉住民の自然な総意として、小泉を存続させるためには高台へ移るべきであるという意志決定に至ったのである。

筆者は、コミュニティ全体が理屈抜きで高台へ移転すべきだという共通認識をもつというような状況があるのではないかと考えている。小泉地区は、リアス式海岸が続く気仙沼において比較的大きな平地を有しているため農家が多い。実際、沿岸部の貴重な平地で農業を営んできた人々にとって、その場所から住まいが大きく離れることによる様々な不具合は容易に想像できる。しかし、今回の大津波は、人間が直感的に「この土地を離れなければならない」と認識するほどの災害であったのではないかと、小泉の人々の確信的な眼差しから感じている。

千年に一度といわれる未曾有の大災害。歴史を遡ると、東北の沿岸部において高台へ移転した集落が数多く存在する。その内のいくつかは今回の津波では被害を受けてしまったが、私たちの先人は数百年に一度の大津波を経験する度に、集落を存続するための高台移転を決意してきたのである。それはまさに、自然の驚異を理解し自然と共存するための人間としての自然な選択だったのだと思う。

人的被害を最小限に抑えた小泉コミュニティが、人間として本能的な共通認識のもと、一丸となって高台移転を決意したのである。ここには学術的あるいは技術的な判断が入る余地はない。小泉の人々による高台移転の選択は、歴史的な英断である。

レジリエンシー／レジリエンス（復元力）が、

震災後の議論で一つのキーワードとなっている。筆者は地域の復元力の根本的な源はコミュニティだと考える。そして、コミュニティとは何かという机上の議論は繰り返されているが、結局は非常に単純なことだということを、小泉でのワークショップを通じて理解し始めている。住民同士の顔が見える日常的な意思疎通と相互扶助なのである。

4. 住民主導による計画検討

震災から1年以上が過ぎ、集団移転へ向けての住民の自主的な行動が多くの被災地で見られるようになったが、その中でも小泉はいち早く具体的な活動に入った地区である。2011年6月5日には「小泉地区集団移転協議会」を設立し、100世帯を超える地区住民の意向を集約、移転先の土地の候補も決めた。

同年7月6日には集団移転計画のキックオフとしての第1回フォーラムを開催し、筆者も「集団移転は未来への贈りもの」という演題で話を提供した。また、送り盆の8月16日の夜には、住民自らの手により被災した市街地に1,000本のロウソクが灯され、浮かび上がった小泉の文字を3月11日に駆け上がった小学校の高台から見守った。

昨年7月以降、隔週で住民ワークショップを実施してきている（25ページ参照）。丁寧に議論を重ねてきたことはやはり、小泉コミュニティとは何かである。例えば、「小泉地区のよいところ」「よいと

ころを引き継ぐアイデア」などのお題で、各々の思いを付箋に書き出しながら白熱した議論を行ってきた。協議会事務局のリーダーシップもあり、筆者らが感動するほどの成果をあげている。

これまでの計画検討の一つの到達点として、2012年4月9日に開催された第6回フォーラムにおいて、全住民へ説明を行った整備計画の鳥瞰図を下に示す。

第6回フォーラム以降も継続的にワークショップを実施してきており、建築協定についての考え方や集会所などの公共施設のあり方についての議論を重ねてきている。以下、この基本計画について、ワークショップの成果との関係や小泉地区の必然性に触れながら、その骨子と要点を説明する。

(1) 等高線に沿った地盤面の設定

移転する高台は、海拔40mで水平に切り土した地盤面を敷地としている。この設定は、ワークショップの初期段階から筆者ら専門家側が念頭に置いていたものであり、できる限り盛り土や擁壁を少なくすることを意図している。それにより造成に関わる工事費を抑えられるのと同時に、安定した地盤面の確保が期待されるからである。特に後者は、高台が将来の災害に対して強靱でなければ、移転すること自体が全く無意味な話となるわけであり、住民も異論なく賛同した理由である。

(2) 共有空間を中心としたゾーニング

小泉の人々がワークショップを通じて頻繁に言及してきたのが、共有空間のあり方である。例え



小泉地区の集団移転計画の鳥瞰パース

ば、ワークショップでも、「共同利用」「共同作業」「近所付き合い」「家庭的つながり」が重要なキーワードとして語られた。

かつての小泉地区は短冊状の宅地割りで、道路からは短辺方向からアクセスする長細い敷地形状であったのだが、各宅地の敷地境界に沿って川から引き込まれた水路があったのが特徴である。小泉の人々には、その水路で野菜を洗ったり米研ぎや洗濯をしたりといった記憶が強く残っている。

そして、道路→住宅→共有空間という配列が、小泉コミュニティを支える基盤として、住民同士の豊かなコミュニケーションとつながりを育んできたことが、ワークショップを通じて再確認された。

(3)向こう三軒両隣を継承するクラスター構成

(1)の地盤面の設定により、敷地と斜面との境界線は必然的に湾曲したものとなる。「鍵をかけなくてもよい」「塀や障壁がいらぬ」など、住民が「プライバシーがないところ」がよいところとして積極的に評価している向こう三軒両隣の関係を、リアス式海岸をイメージさせる地形を活かしたクラスターとして継承する宅地計画としている。

「だれがどこにいて何をしているかがわかる」「みんな知っているから安心できる」という近所付き合いが小泉コミュニティの個性であり、またそれを存続させようとする大きな理由でもある。

(4)子どもと高齢者に優しい移動環境

「頼られる小泉」を目指して、小泉の人々と新しいまちの姿を議論してきた。特に「孫の世代のための集団移転」「歳をとったら来なくなる場所」という目標像は早くから共有されてきた。

(2)(3)のゾーニングにより明確になったのが、歩車分離の構成である。クラスターをつなぐかたちの湾曲した幹線道路では、自動車の走行速度は自然と落ちる。6～8戸単位のクラスターへはクルドサックで道路を引き込み、共有空間へは遊歩道でアクセスする。いわゆるラドバーン式であるが、外的な模倣としての適用ではなく、小泉コミュニティの内的な必然として到達した構成である。

また、これらの機能的な安全・安心だけでなく、小泉の人々がラドバーン式に愛着を抱き魅力を感じたのは、それにより実現される共有空間の豊かさである。「子どもを地域みんなで育てる人のつながり」、それを継承するための構成原理である。

(5)既存施設へのシームレスなつながり

移転先は、ランドマークでもあった美しい小泉海岸が少しでも望める場所、そして小泉の子ども全員が通う学校高台とのつながりが重視されている。特に小泉小学校と中学校は、3月11日、多くの小泉の方々が駆け上がって助かった場所である。将来の小泉人が育つ場所とのつながりを大事にしたい、子どもたちが安全に学び育つ環境を確保したいという意図で、移転する高台の場所と小・中学校への動線が計画されている。

また、残念ながら建設予定の三陸縦貫自動車道を横断するかたちとなっているが、隣地の老人保健施設「はまなすの丘」との関係も、子どもやお年寄りと施設の入居者が徒歩で交流できるような活動がイメージされている。

5. おわりに

小泉地区は完全に国や市の復興計画の先を走ってきた。無事、今年5月下旬に事業化されたものの、これまでの過程では実際の事業費や自己負担の大きさなど様々な不確定要素があった。しかし、小泉の人々はそれを承知で動いてきた。制度や予算を待ってからでは一律な枠の中でしか検討できない。上からの条件提示を前提にするのではなく、自分たちのまちの再生は自分たちで描き、それを実現するために必要な手段を選ぶ。前例がなければ新しい手法を生み出せばいい、そういう意気込みである。

筆者は、このプロジェクトには小泉地区の住宅が高台へ移ること以上の意義があると考えている。100世帯以上の集落は小泉地区のまわりに決して多くはない。これから復旧や再建が進んだとしても、近い将来いわゆる限界集落として孤立する地域も増えてくるだろう。いよいよその場所で生活が困難となったときに人々に頼られるような小泉を目指したい。

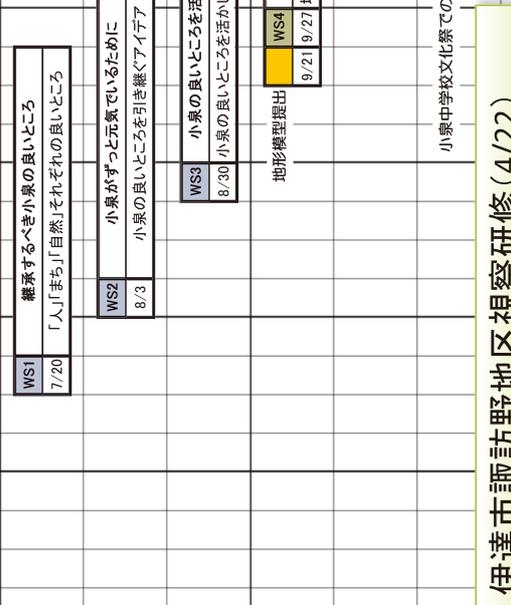
日本が一つのコミュニティであるならば、もっとも尊重すべきは、そこに生きる人々の希望であろう。小泉の人々が目標と意欲をもって生まれ変わりを望むのであれば、専門家として全力で支援したい。なぜなら、生きようとすることの是非を問う権利はその本人しかないと思うからである。生きるために協力し合う、それがコミュニティの根源である。

小泉地区 防災集団移転事業 ワークショップにおける検討実績

検討項目	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
<p>4/24 「小泉の明日を考える会」結成 6/5 「小泉地区集団移転協議会」設立 6/14 箕山浩市長に要望書提出</p>	<p>F-1 第1回復興ワークショップ開催 7/6 集団移転は未来への贈りもの 送りの火を灯す集い</p>	<p>F-2 第2回復興ワークショップ開催 8/16 「人」「まち」「自然」それぞれの良いところ 五感で考える「まち」の姿 11/13 「まち」の姿 11/22 みんなで復興みんなで再生</p>	<p>F-3 第3回復興ワークショップ開催 11/13 五感で考える「まち」の姿 11/22 みんなで復興みんなで再生</p>	<p>F-4 第4回復興ワークショップ開催 11/22 みんなで復興みんなで再生</p>	<p>F-5 第5回復興ワークショップ開催 3/11 追悼と感謝！！</p>						
<p>「暮らしたイメージの共有」</p>											
<p>「イメージの可視化・図面化による共有」</p>											
<p>「良好な景観づくり・まちなみの維持管理・運営など、役割の共有」</p>											
<p>第17回「わが家のぬくもり①」(6/12)</p>											
<p>言葉共有</p>											
<p>姿を共有</p>											
<p>役割を共有</p>											



第17回「わが家のぬくもり①」(6/12)



伊達市諏訪野地区視察研修(4/22)

<p>WS1 継承すべき小泉の良いところ 7/20 「人」「まち」「自然」それぞれの良いところ</p>	<p>WS2 小泉がずっと元気であるために 8/3 小泉の良いところを活かす「まちづくり」 8/30 小泉の良いところを引継ぐアイデア</p>	<p>WS3 小泉の良いところを活かした「まちづくり」 8/30 小泉の良いところを引継ぐアイデア</p>	<p>WS4 新しい小泉の「まちなみ」ゾーニング 9/21 地形模型を使った「まちなみ」ゾーニングの検討</p>	<p>WS5 「まちなみ」ゾーニングから土地利用計画へ 10/11 「まちなみ」ゾーニング案(3案)の比較検討</p>	<p>WS6 「まちなみ」ゾーニングから土地利用計画へ 10/23 ミニ講座+ゾーニング案の図面化(2案へ)</p>	<p>WS7 五感で考える「まち」の姿 11/7 土地利用計画図面提出+小泉らしい住宅とは？</p>	<p>WS8 土地利用全体計画の承認～景観づくりへ 11/28 鳥瞰図提出+模型による住宅形態・素材の検討</p>	<p>WS9 小泉コミュニティのこれまでもこれから 12/23 支え合う仕組み、集いの場などの検討</p>	<p>WS10 災害公営住宅と地域交流センター 1/17 災害公営住宅の位置+交流センターの機能</p>	<p>WS11 良好な景観づくりと美しいまちなみの維持 2/3 建築協定とまちなみの維持・管理組織の必要性</p>	<p>WS12 「土地の再生」被災跡地の利活用 2/23 被災跡地に求められる機能とは？</p>
---	---	---	--	---	--	--	---	---	--	---	--